

〈論文〉

「単音」について

阿久津 智

要 旨

「単音」の意味・用法について、文献資料によって調べた（主にコーパス・データベース類を用いた）。その結果、以下のことがわかった。(1) 現代日本語（書き言葉）においては、《音符の表す音》や《単旋律》など、音楽分野での使用が多い。これに次いで、《音声の最小単位》の意味でよく使われるが、具体的には、音節（モーラ）レベルの音ととれるものが多い。(2) 「単音」は、中国では12世紀に使われた例があり、中国語では、主に《単音節》の意味で使われている。日本では、江戸時代に、《音節》などを表すのに使われた例が見られる。明治以降は、さまざまな意味で使われようになるが、言語分野においては、《音節》、《母音》が主な意味であった。明治期の日本文典では、《母音》を「単音」とし、《音節》を「複音」と呼ぶ例が多く見られた。(3) 「単音」を《音声の最小単位》の意味で用いる例は、明治後期に現れ、大正期には、抽象音声を表す「単音」が現れる。昭和初期には、音韻論的な単位である「音素」と区別して、「単音」を用いるようになった。

キーワード：単音，音素，音節，語史

1. はじめに

本稿では、言語学・音声学用語である「単音」を取り上げ、その語史を見ていく。

まず「単音」という語の概要を知るために、これと類似する概念を表す

音韻論用語の「音素」と合わせて、『言語学大辞典 第6巻 術語編』（三省堂1996）、『日本国語大辞典 第二版』（小学館2000-02）（以下『日本国語大』）における記述を見ておきたい。

『言語学大辞典』には、次のようにある。

- (01) 単音（たんおん） 英 phone, 仏 son, 独 Phon 《音声》／音声は、調音器官の運動の面からいっても音声波の波形の面からいっても、本来連続的なものである。たとえば [pa] という音声の波形を観察する場合、どこからどこまでが [p] であり、どこからどこまでが [a] であるかを定めることは厳密に言えば不可能である。しかし、そこにはまた調音器官が一定の位置にあるか、あるいは一定の運動をくり返しているとなしうる「部分」が存在するのも事実である。こうした個々の「部分」を単音（または素音）といい、音声学的な記述においては音声を単音の連続したものとする。／[中略]／なお、単音と同様の意味で「分節音 (segment)」という用語が使われることもある。(／は改行を表す。以下同じ)
- (02) 音素（おんそ） 英 phoneme, 仏 phonème, 独 Phonem 《音韻》／特定の言語において、継起的（非同時的）にそれ以上分割されない、最小の弁別的な音韻論の単位。「音韻」「音族」「音項」などの訳も行なわれたが、現在では、「音素」または「フォネーム」が定着している。／音素は、一回限りでまちまちな単音に抽象化を施したものであり、音素と単音の関係は、ソシユール (F. de Saussure) のラング (仏 langue) とパロール (仏 parole) の関係に相当すると説明される。[以下略]

言語学の入門書では、「単音」は、「意味の区別とは関係なく言語音そのものを細かく観察・記述する」ための音声学 (phonetics) の最小単位、

「音素」は、「ある特定の言語において音の違いが意味の違いに関係するかどうか」によって設定される音韻論（phonology）の最小単位などと説明されている（斎藤 2010：34）。

一方、『日本国語大』には、次のようにある（「単音」には、「たんおん」のほかに、「たんいん」も立項されているが、空見出しであり⁽¹⁾、本稿では読み方の問題については扱わないため、省略する）。

- (03) たんおん【単音】《名》①音声学で、音声の連続を分解して得られる最小の記述単位。個々の母音・子音，k t p ŋ a i などの類。②長母音や二重母音をもたずに一音節をなす音。*漢字三音考（1785）皇国字音の格「単音とは、あいうかきく等の如く，単にして余響なき音にして」③音楽で，単一の音声部でできている音楽。また単声，モノフォニーのこと。*音楽字典（1909）「Unisone ユニソーン，同音，単音」④同時に一つだけ聞こえる音。単一の音。*医師高間房一氏（1941）〈田畑修一郎〉三「単音でなく，微弱な重音があるので弁膜症の気味があるとも診られた」
- (04) おんそ【音素】《名》（{英} phoneme {ドイツ} Phonem {フランス} phonème の訳語）ある言語の音声をも音韻論的に考察して得た単位。普通 /a/ /k/ のように // に入れて示す。音声学的には異なる発音でも，同じ音声的環境に現われず，互に単語を区別する機能を持たず，調音が類似するものは，同一の音素と認められる。たとえば，日本語の「ん」について，音声学的には [m] [n] [ŋ] などと区別されるが，音韻論的には同一の音素 /n/ と認められるなど。また，ある言語では異なった二つの音素とされているものが，他の言語では一つの音素とされることがある。

これらから，この両語には，語史的に大きな違いがあることがわかる。

「単音」は、今日の音声学的概念（phone に相当）とは別に、いくつかの異なる概念を表すのに使われてきた語であるのに対して、「音素」は、その概念自体が比較的新しく、その概念を表す phoneme の翻訳語として形成された語だといえるであろう（原語は英語で代表させる。以下同じ）。

さらに、ここからは、次のような疑問点が浮かぶ。

- ① 「単音」は、一般にどのような意味で使われることが多いのか。
- ② 「単音」という語は、どのように意味が変遷してきたのか。
- ③ 音声学用語としての「単音」は、どのように形成されたのか。
- ④ 「音素」は、phoneme 以外の意味では、使われていないのか。

このうち、④に関しては、筆者はすでに論じたことがある（阿久津 2022: 17-21）。それを要約していえば、「音素」という語は、phonology（音韻論）と phonetics（音声学）とが未分化であった明治末に、母音や子音レベルの音、すなわち《単音（音声）》に相当する意味で使われていたが、昭和初期に、新たに phonology や phoneme（音素）の概念がヨーロッパから伝わってから、phoneme の翻訳語として定着した、ということになる。④については、本稿では触れない。

以下、①に関して、今日の「単音」の意味・用法を概観し（2 節）、②に関して、「単音」の意味の変遷をたどり（3 節）、③に関して、音声学用語（概念）としての「単音」の形成を見ていく（4 節）。

なお、本稿では、用例の収集に、主にコーパス・データベース類を利用する（大正期以前の出版物は、出版元を省略する）。これらの最終閲覧は、いずれも 2023 年 10 月である。漢字の字体は、現代日本語の通用字体を用いておく。

2. 現代における「単音」の意味・用法

2.1 現代の国語辞典における「単音」

現代における「単音」の意味・用法を見るに当たって、まず、現代の国語辞典における「単音」の意味記述を見ておきたい。

現代の国語辞典には、「単音」について、たとえば、次のような記述が見られる。

- (05) たんおん【単音】①唯一の音。②純音に同じ。③音声を分解して得られる最小の単位。これが集まって音節をなす。（『広辞苑 第七版』岩波書店 2018）
- (06) たんおん【単音】《名》①音声学で、連続する音声を個々に分解して得られる最小の単位。母音と子音に大別される。②ハーモニカで、リードが一行だけに並んでいるもの。⇔複音（『明鏡国語辞典 第三版』大修館書店 2020）
- (07) たんおん【単音】①《言》音声の構成要素となる、最小単位の音。^{おん} a, k, s, t など。②《音》単独で出す音。^{おん} ③《理》一つの周波数・^{しんぶく} 振幅だけを持つ音。（『三省堂国語辞典 第八版』三省堂 2021）

これらに共通するのは、『日本国語大』の「単音」①に相当する、言語学用語としての意味（05の③、06の①、07の①）である（《音声の最小単位》としておく）。これが現代日本語における「単音」の主要な意味といえそうである。

(05)の①は、やや漠然としているが、『日本国語大』の「単音」④に当たるものととらえておく（《単一の音》としておく）。

(05)の②は、(07)の③に相当する（《純音》としておく）。これは、英

語の simple tone, あるいは pure tone の翻訳語だと思われる。

(06) の②は、小型の国語辞典に多く見られる語義であるが(表1参照)、『日本国語大』には載っていない(《単音ハーモニカ》としておく)。小型の国語辞典は、学習用国語辞典であり、この意味の「単音」が学校教育で使われることから、これを載せているのであろう。

(07) の②は音楽における「単音」である。音楽用語の「単音」は、音楽辞典では「純音」の別名となっているが⁽²⁾、この分野では、「単音」を1つの音符で表される音(note)の意味で使うことが多いようなので、『純音』とは別に扱っておく(《音符の表す音》としておく)。

『日本国語大』の「単音」②・③(それぞれ、『短音節』、『単旋律』としておく)は、『単旋律』が1つの国語辞典に見られただけで(表1参照)、現代の他の国語辞典には見られなかった⁽³⁾。

今日の主な国語辞典における「たんおん(単音)」の意味区分をまとめると、おおよそ次のようになる(表1)。

表1 現代の国語辞典における「単音」の意味区分

辞典 発行年	意味	音声の 最小単位	単音 ハーモニカ	短音節	純音	音符の 表す音	単旋律	単一の 音
大辞泉(2) 2012		○	-	-	-	-	-	-
大辞林(4) 2019		○	-	-	-	-	-	-
新選国語辞典(10) 2022		○	-	-	-	-	-	-
集英社国語辞典(3) 2012	①	②	-	-	-	-	-	-
旺文社国語辞典(11) 2013	①	②	-	-	-	-	-	-
学研現代新国語辞典(6) 2017	①	②	-	-	-	-	-	-
岩波国語辞典(8) 2019	①	②	-	-	-	-	-	-
新明解国語辞典(8) 2020	①	②	-	-	-	-	-	-
明鏡国語辞典(3) 2020	①	②	-	-	-	-	-	-
現代国語例解辞典(5) 2016	①	-	-	-	-	-	②	-
広辞苑(7) 2018	③	-	-	-	②	-	-	①
三省堂国語辞典(8) 2021	①	-	-	-	③	②	-	-
日本国語大辞典(2) 2000-02	①	-	-	②	-	-	③	④

() 数字は、辞典の版。○は、各辞典における意味区分。

このように、「単音」にはさまざまな意味があり、《音声の最小単位》が共通している以外、どの意味が載せられているかは、国語辞典によって、さまざまである⁽⁴⁾。

そこで、次に、コーパス・データベース類を用いて、現代日本語（書き言葉）において、「単音」がどのような意味で用いられていることが多いのかを見ていきたい。

2.2 現代日本語（書き言葉）における「単音」

まず、「現代日本語書き言葉均衡コーパス（BCCWJ）」（コーパス検索アプリケーションとして「中納言」を使用）で「単音」（短単位・語彙素「単音」）を検索した結果を挙げると、現れた件数は17件で、その意味の内訳は、《音符の表す音》10件（「単音弾き」を含む）、《音声の最小単位》6件⁽⁵⁾、《単旋律》1件であった（《音符の表す音》と《単旋律》については、どちらかに決めにくい例も見られるが、本稿では、便宜的にどちらかに振り分けておく）。

- (08) “バンピング・ピアノ”なんていうけれど、なに、要は単音をムチャクチャに連打しているだけ。（杉原志啓、上野シゲル『全米TOPヒッツ熱中本'55-63』学陽書房1997）（下線は筆者。以下同じ）
- (09) まず、単音でドレミファソラシドを弾いてみます。（奥秋ユキエタ『はじめてアコギをさわる人のためのギター安心講座』自由現代社2004）
- (10) [u:] が単音化して [u] になる音変化は林哲郎『英語学史論考』10-11頁に詳しい（平林幹郎『サピアの言語論』勁草書房1993）
- (11) 日本映画の構成は、日本の小説と同じく一本の線の流れであり、多音的でなく単音的であり、きわめて散文的である。（佐々木基一

『映像の芸術』講談社 1993)

(08)・(09) は《音符の表す音》の例, (10) は《音声の最小単位》の例, (11) は《単旋律》の例 (ただし, 比喩的な用法) である。

次に, 「昭和・平成書き言葉コーパス (SHC)」で「単音」(短単位・語彙素「単音」) を検索した結果を挙げると, 現れた件数は 10 件で, その意味の内訳は, 《音声の最小単位》5 件⁽⁶⁾ (2 記事: 1981 年, 1989 年), 《音符の表す音》4 件 (3 記事: 1973 年, 1989 年, 2013 年), 《単旋律》1 件 (1 記事: 2013 年) であった。

(12) 「ア」という単音を幾つか連続させる虚しい努力がつづきました。

(五味川純平「暗涙 声は失せても黙し難し」『文藝春秋』1981-10)

(13) 教官が足踏みオルガンを単音で鳴らす。(丸山圭三郎「哲学者がカラオケに狂うと」『文藝春秋』1989-13)

(14) 片手でそっと弾かれる単音のシンプルなテーマ。(村上春樹『色彩を持たない多崎つくると, 彼の巡礼の年』文藝春秋 2013)

(12) の「単音」は《音声の最小単位》, (13) の「単音」は《音符の表す音》, (14) の「単音」は《単旋律》だと思われる。ただし, ここで《音声の最小単位》とした例は, いずれも《音節》ととることができるもので⁽⁷⁾, 音声学の専門的な意味の「単音」とは必ずしも用法が一致しないように思われる。

続いて, 「朝日新聞クロスサーチ」を用いて, 2000 年 1 月 1 日～2022 年 12 月 31 日の『朝日新聞』における「単音」を検索した結果を挙げると, 現れた件数は 46 件 (記事の件数) で, そのうち, 重複する記事のもの 1 件, 「単音節」3 件, 「単音」を含む複合語 5 件 (「単音形」, 「単音文字」, 「単音ハーモニカ」, 「単音ギター」, 「単音着信メロディー」)⁽⁸⁾ を除いた 37

件について、その意味の内訳を見てみると、《音符の表す音》19件、《単旋律》11件、《音声の最小単位》4件、《単一の音》2件、《純音》1件であった。

- (15) 鍵盤を強くたたき、指一本一本で単音を奏でながら、高速で指を動かす。（『朝日新聞』2022/11/11 朝刊）
- (16) チャイムを思わせるピアノの単音で最初の曲「If I Were A Bell」が始まると、「オーッ」と歓声があいた。（『朝日新聞』2015/09/29 夕刊）
- (17) 夏ごろ「ア」「イ」など単音の発声などから訓練を始めた。（『朝日新聞』2006/04/18 朝刊）
- (18) しばらくして澄んだ駒音が聞こえてきた。矢倉を目指す▲6八銀なら銀を6九の金に引っ掛けるため、単音にはならない。（『朝日新聞』2012/06/28 朝刊）
- (19) 単音を出すU字形の音叉^{おんさ}を活用するなどして音の高低を聞き分ける指導に力を入れる。（『朝日新聞』2005/10/21 朝刊）

(15) の「単音」は《音符の表す音》、(16) の「単音」は《単旋律》、(17) の「単音」は《音声の最小単位》、(18) の「単音」は《単一の音》、(19) の「単音」は《純音》だと思われる。ただし、ここで《音声の最小単位》したものは、(17) を含め、いずれも《音節》ととることのできる「単音」であった。

以上を見ると、現代日本語（書き言葉）における「単音」について、最もよく使われる意味は《音符の表す音》であり、《単旋律》も含め、音楽の分野での「単音」の使用が多いことがわかる。国語辞典における主要な意味である《音声の最小単位》は、これに次ぐ。ただし、ここで《音声の最小単位》とした例は、専門的な用法とは異なり、子音や母音レベルの音

というより、音節（モーラ）レベルの音ととれるものが多く見られた。これは、日本語については、基本的に仮名1字で表されるものが1つの音として意識されていることをうかがわせるものであり、「音韻」という用語が、分節音として、《音素》を表す場合と《音節（モーラ）》を表す場合とがあるのに平行する用法だといえそうである（ただし、「音韻」と異なり、「単音」は、専門的には、一義（子音や母音レベルの音）である）。

3. 「単音」の意味の変遷

本節では、「単音」がどのような意味で使われてきたかについて、コーパス・データベース類を用いて、見ていく。

3.1 中国語における「単音」

初めに、「単音」が中国語で使われていたか、使われていたとすれば、どのように使われていたかを確認しておく。

まず「漢籍全文資料庫」、および「中国哲学書電子化計画」で「単音」を検索し、現れた用例を確認したところ、「単音」の用例は現れず、「単音善」（「単」の音は「善（ゼン）」）、「単音丹」（「単」の音は「丹（タン）」）などの音注が多く表れた。

一方、「中国基本古籍庫」の検索結果には、「単音」の例がいくつか現れた。古い例を挙げておく。

- (20) 然二合者是双音合為單音也如双為者焉單為旃双為者与單為諸（しかるに二合は双音が合わさって単音になるものである。たとえば、双が「者焉（これ）」であるものは、単が「旃（これ）」であり、双が「者与（これか）」であるものは、単が「諸（これか）」である）（鄭樵「論華梵中」）（唐順之『稗編』卷81文芸10, 1581）

- (21) 又支微魚虞数韻并各韻影喻二母皆單音之字（また「支・微・魚・虞」の数韻，併せて各韻の「影・喻」の二字母はみな単音の字）
（嵇璜ほか『皇朝通志』卷17「七音略」4, 1787）

(20) は，たとえば，「者焉（シャエン）」を縮めると「旃（セン）」になり，「者与（シャヨ）」を縮めると「諸（シヨ）」になるという，2音節が1音節になる合音（合字）について述べており，この「単音」は《単音節》を表していると思われる。

(21) は，韻尾のない字（「支・微・魚・虞」韻などの字），あるいは頭子音のない字（「影・喻」母の字）を「単音之字」と呼んでいるようで，漢字の音を反切で示すときに使いやすい字について述べているようである。

(20) は，12世紀の鄭樵の著作を引き，(21) は，清代の欽定韻書である『音韻闡微』（1726）を引いている。ここからは，「単音」が12世紀に使われたことがわかるが，古代中国語において「単音」は例が乏しく⁽⁹⁾，この「単音」が日本に伝わり，日本語で使われるようになったものかどうかは必ずしもはっきりしない。

現代中国語では，「単音」という語はあまり使われないようである。「CCL 語料庫」の「現代漢語」で「単音」を検索した結果は269件で，「単音節」，「単音詞」，「単音副詞」，「単音形容詞」など，「単音」を含む言語学・中国語学用語の複合語が多数を占めた。ほかに，音楽分野の記事に「単音」（を含む語）が18件⁽¹⁰⁾ 現れ，単独で使われて，言語の音（主に《単音節》）を表すと思われる「単音」は12件見られた。

- (22) 她下意識的跟著那主調彈奏著一個一個的單音（彼女は無意識のうち主調に合わせて一つ一つの単音を弾奏した）（瓊瑤『聚散兩依依』1979）

(23) 她会情不自禁的发出興奮的单音：“猪！猪！”（彼女は思いもよらず興奮した单音を発するだろう。「豚！豚！」）（『読者』合訂本）

(22) は《音符の表す音》の例，(23) は《单音節》の例である。

この2つの意味は，日本の『中国語大辞典』（角川書店 1994）に掲載されている。

(24) 【单音】 dānyīn [名] ① 〈語〉单音。单音節。フォーン。 ② 〈音〉单音。

上の①には，音節レベルの音（「单音節」）と子音・母音レベルの音（「フォーン」）とが含まれている。現代中国語の音声学（語音学）用語では，phone に「单音」を用いるのは一般的ではないようであるが（ふつう「音素」が用いられる），「单音」が使われることもあるようである⁽¹¹⁾。なお，『漢語大詞典』（上海辞書出版社 1986-94）には「单音」は立項されていないが，「单音詞」は見られる。「单音詞」の「单音」は《单音節》を意味していると思われる。

3.2 江戸時代以前の日本語における「单音」

次に，日本語における「单音」を見ていく。まず江戸時代以前の文献における例を見てみたい。

『日本国語大』の「单音」には，本居宣長『漢字三音考』（1785）の例が挙げられており，これが「单音」の初出例となっている。

(25) 单音トハ。ア イ ウ カ キ ク等ノ如ク。单ニシテ余響ナキ音ニシテ。支脂微魚虞摸歌麻等ノ韻 [割り注略] ノ字是也。（本居宣長『漢字三音考』「皇国字音ノ格」22ウ，1785）（『日本語史研究資料』

による)

この「単音」は、中国音韻学でいう「陰声」の韻（韻尾をもたない韻）を表している（あるいは、ここには『音韻闡微』などの影響があるかもしれない）。これは、日本語に即していえば、「長母音や二重母音をもたずに一音節をなす音。」（『日本国語大』「単音」②）であり、《短音節》（英語の軽音節 light syllable に相当）としてとらえることができるものである。

ほかに江戸時代以前の文献に「単音」が見られないか、いくつかのコーパス・データベース類で、「単音」を検索してみた。その結果、「日本語歴史コーパス（CHJ）」（「明治・大正編」を除く）の検索（短単位・語彙素「単音」）、ジャパナレッジ「日本古典文学全集」（『新編 日本古典文学全集』小学館）の「古典本文」の検索、「東京大学史料編纂所データベース検索」の「横断検索」には、「単音」は現れず、ジャパナレッジ「JKBooks 群書類従（正・続・続々）」に2件現れた。

- (26) 若_二我邦_一則不_レ然、四十七単音、開闔旋轉、以為_二無窮之語言_一、（安積澹泊『澹泊齋文集』巻7「東雅序」1725か）（『続々群書類従 第十三 詩文部』 p.400）
- (27) 又二声ノ音モ、シユハ、スニ通ジ、シヨハ、ソニ通ズ、此類皆約シテ一音ニ至ルヲ思ヘバ、和語ニモ拗音単音共ニ具レリ、（松下見林『本朝学原浪華鈔 三』1698序）（『続々群書類従 第十 教育部』 p.512）

(26) の「単音」は「四十七単音」とあり、仮名で表される《音節》を表している。(27) の「単音」は、「拗音」と対になっており（「シユ」、「シヨ」が拗音、「ス」、「ソ」が単音）、《直音》を表している。いずれも、(25) より古い例である。(25)～(27) は、細かい違いはあるものの、いず

れも日本語の仮名レベルの音，すなわち，音節（モーラ）レベルの音を意味している。

ほかに、「単音」は，オランダ語の発音に関する語学書である『西音発微』に見える。

- (28) カカ カイキ カウケ カエケ カオコ／此経ノ五韻字ハ上ノ五韻母字ノ単音ヨリ生スル五字ニシテ其音モ皆重音也 下四十字同例ト知ルヘシ（大槻玄幹『和音唐音対注 西音発微』7オ，1826）（早稲田大学図書館「古典籍総合データベース」による）（「此経ノ五韻字」はカ行の5字，「上ノ五韻母字」はア行の5字，「下四十字」はサ行～ワ行の40字を指す）

同書では，「ア・イ・ウ・エ・オ」のほか，「ン」を「単音」としており，「アン」や「ア、」などを「合音」＝「拗音」，カ行～ワ行音を「重音」としている。ここから，この「単音」は，母音など，単独で音節をなすことのできる音を意味しているように思われる（あるいは，《音声の最小単位》に近い意味を担っているとも考えられる）。

3.3 明治以降の日本語における「単音」

続いて，明治以降の文献における「単音」を，コーパス・データベース類を用いて，見ていく。

まず，「日本語歴史コーパス（CHJ）」（明治・大正編）で「単音」（短単位・語彙素「単音」）を検索した結果を挙げると，現れた件数は16件（2文献）で，そのうち，単独の「単音」は1件のみで，ほかは，「単音」を含む複合語（「単音語」13件，「単音字」1件，「単音唱歌」1件）であった（「単音唱歌」以外は同一文献に現れた例である）。

- (29) 十二 音楽 単音唱歌及複音唱歌を授く 又便宜音曲等を授く（「高等女学校規程」『女学雑誌』1895-2）
- (30) 漢文家は必ず言ん 漢字の単音は限りあれど、之を綴りて辞（即熟語）となして万変に應ずれば決して不足なしと、（久米邦武「国字改良論」『太陽』1901-2）

(29) の「単音唱歌」は、単旋律による唱歌で、この「単音」は《単旋律》に当たる。(30) の「単音」は《単音節》のことであろう（「単音語」, 「単音字」の「単音」も同じ）。

次に、ジャパナレッジ「明治文学全集」（『明治文学全集』筑摩書房）で「単音」を検索した結果を挙げると、5文献⁽¹²⁾に「単音」が現れたが、そのうち、単独の「単音」は3件のみで、ほかは、「単音」を含む複合語（「単音語」, 「単音律」, 「重単音」など）、あるいは漢文中に現れた「単音」であった。

- (31) 吾邦ノ言語ハ印度西洋諸国ノ語ト同シク単音ヲ組織シテ語ヲ成ス者ニシテ支那ノ如ク一字ニ多少ノ意義ヲ含メル者ニ非ス、（西村茂樹「文章論」1884）（『明治文学全集 3 明治啓蒙思想集』p. 361）
- (32) 蓋し言語に ポリシラビク 重音, モノシラビク 単音 の二種あり、（末松謙澄『日本文章論』1886）（『明治文学全集 79 明治芸術・文学論集』p. 62）
- (33) みだりがはしき合奏に悩み／水銀の如く、／影に、のがれむとして、／からむかえ鑼笛の単音。（山村暮鳥『三人の処女』1913）（『明治文学全集 61 明治詩人集（二）』p. 240）

(31)・(32) の「単音」は《単音節》で（「単音語」, 「重単音」, および漢文中の「単音」も同じ）、(33) の「単音」は《単旋律》だと思われる。

以上からは、明治期における「単音」は、音楽におけるもの（《単旋律》）

と、言語におけるもの（《単音節》）とが主な用法であったことがうかがえる。

さらに、明治初期に「単音」がどのような意味で使われていたかを見るために、「国立国会図書館デジタルコレクション」で「単音」を検索してみたところ、明治初年の文献に、次のような例が現れた。

- (34) ぼいんのことを単音^{たんおん}といひ。(古川正雄『絵入智慧の環 二編下 詞の巻』1871: 1ウ)
- (35) a e i o u y ノ母韻ヲ一ツ、用ルヲ単音ト云。但シ長短剛柔ノ声アリテ読法一ナラズ。(戸沢光徳『洋学指針 仏学部』1872: 5ウ)
- (36) Monophthong (mon'-of-thong), *n.* 単音^{ヒトイン}ノ字^ジ(柴田昌吉, 子安峻編『附音挿図 英和字彙』1873)
- (37) Solo (sō' lō), *n.* 単音^{タンイン}, 単歌^カ(同上)(柴田昌吉, 子安峻編『附音挿図 英和字彙』1873) (「同上」は「音楽ノ語^{オンガク}」を指す)
- (38) 単音^{アーチクレートソウンド}ヲシテ同一ナラシムルコトハ特ニ同種族ノ間ニアリテ父母兄弟ノ自然ノ浸漸薰陶ヲ以テ之ヲ誘導スルニアラザレハ決シテ能ハザルガ故ナリ(秋山恒太郎訳『百科全書 人種編 上』1874: 11オ)
- (39) 話談ノ間或ハ吸息及ヒ呼息間ニ其単音若クハ其連続音ヲ発スルコトアレトモ(ルーミス, 小林義直訳『内科必携 理学診断法 肺臓之部 二』1876: 13オ)
- (40) 烏, 鷺, 杜鵑等ノ如キ単音ヲナス鳥ハ一対或ハ二対ノ筋ヲ有ツ(能勢栄訳『動物生理学』1877: 28ウ)
- (41) 十種ノ単音神歌, 及ヒ単音二音ノ俚歌, 十種ヨリ十二種マテヲ学ハシム,(フアルク, 柴田承桂訳『普魯士学校規則』1877: 75)
- (42) 又其表面ニ首尾一様ニシテ, 高低屈曲ナキ不快ナル単音ノ如キ性質ヲ具フル,(関藤成緒訳『百科全書 地文学』1877: 38-39)

(34) の「単音」は《母音》(vowel), (35) の「単音」は《単音節》(あるいは《単母音》か), (36) の「単音」は《単母音》, (37)・(40)・(41) の「単音」は《単旋律》, (38) の「単音」は《分節音》(articulate sound), (39) の「単音」は《単一の音》, (42) は比喩的な用法で《単調》(monotone) であろう。ここから、「単音」のさまざまな意味・用法が、すでに明治初年に現れていることがわかる。

3.4 言語音を表す「単音」

前項で見たように、明治期には、「単音」は、言語分野では、主に《単音節》や《母音》の意味で使われている。そこで、ここでは、「国立国会図書館デジタルコレクション」, 国立教育政策研究所教育図書館「貴重資料デジタルコレクション」によって、日本文典（日本語文法教科書）や辞書において「単音」がどのように使われているかを見ておく。

日本文典では、「単音」は《母音》の意味で使われることが多い。例を挙げる。

(43) 母韻^{ぼいん}とはアイウエオのいつゝの音^{こゑ}なり。子韻^{しいん}とはのこり四十五音^{おん}のことなり／みぎのいつゝのこゑより。のこり四十五音^{おん}はうまるゝものにて。いつゝのこゑは母^はのごとく。四十五おんは子^このごとし。これより母韻^{ぼいん}子韻^{しいん}てふなはいできぬるなり。韻^{いん}とは音^{おと}といふもおなじやうなるこゝろとしるべし／またぼいんのことを単音^{たんおん}といひ。しいんのことを複音^{ふくおん}といふ。そは単^{たん}とはひとへの。複^{かく}とはふたへのといふこゝろにて。ぼいんはひとへのこゑ。しいんはふたへのこゑなればなり（古川正雄『絵入智慧の環 二編下 詞の巻』1871: 1オ-1ウ）

(44) 阿行^{アギヤウ}ノ五音ハ、喉^{いん}ヨリ単^{たん}一ニ出ツ、コレヲ単音^{たんおん}ト名ツク。加行^{カギヤウ}以

下、九行ノ諸音ハ、其行毎ニ、各、其音ヲ呼ビ^{オコ}発ス一種ノ声アリ
テ、コレヲ^{ハツセイ}発声 (Consonant.) ト名ヅケ、単音、ソノ^{ヒビキ}韻トナリ、
発声ト、単音ト、相熟シテ、始メテ音ト成ル、此ノ故ニ、加行以
下ノ九行四十五音ヲ、^{ジユクオン}熟音 (Syllable.) ト名ク、単音ハ、斯克発
声ノ韻トモナルガ故ニ、亦、^{ボケン}母韻 (Vowel.) ノ称アリ。(大槻文彦
『日本辞書 言海』「語法指南 (日本文典摘録)」1889: 2)

(43) は、先に挙げた (34) に前後の部分を加えたもので、学制発布
(1872) 以前に刊行された先駆的な国語教材からの引用である。ここでは、
五十音のうち、ア行の音を「母韻」と呼び、その他の行の音を、「母韻」
から生じる音という意味で、「子韻」と呼んでいる。また、「母韻」を、1
つの音として、「単音」と呼び、「子韻」を、2つの音 (子音 + 母音) とし
て、「複音」と呼んでいる。

(44) は、日本初の近代的国語辞典とされる『言海』の冒頭に置かれた
「語法指南 (日本文典摘録)」からの引用である。ここでは、ア行の音を
「単音」(または「母韻」と呼び、カ行以下の音を、「発声 + 単音」(子音
+ 母音) という意味で「熟音」と呼んでいる。

明治期の日本文典には、《母音》に、「母音」や「母韻」のほかに、「単
音」という言い方を挙げているものが多い。以下に、《母音》の意味の
「単音」を挙げる日本文典を挙げておく (いずれも、「母音」とともに「単
音」が使われている)。

物集高見『初学日本文典 上』1878

落合直文・小中村義象『日本文典』1890

村山自彊『普通教育 国語学文典 前編』1891

村田鈔三郎『国語文典』1893

秦政治郎『皇国文典』1893

- 岡崎遠光『日本小文典』1895
豊田伴『新撰日本文典』1895
大宮兵馬『日本語法』1896
杉敏介『中等教科 日本文典』1898
高田宇太郎『中等国文典』1899

また、明治末・大正期の代表的な国語辞典には、「単音」を《母音》とするものが多い。

- (45) たんおん [単音] (名) 五十音図の「アイウエオ」の音。母韻。綴音の対。(金沢庄三郎編『辞林』1907)
(46) たんおん (単音) ㊦ 五十音図中ノあいうえおノ称。単純ナルモノトシテノ語。複音ノ対。(山田美妙編『大辞典 下巻』1912)
(47) たんおん {単音 (名) 其のもののみにて一音をなす音。即ち、五十音図のあ・い・う・え・おなどの音。(複音・綴音の対) 漢字三音考皇国字音格「単音とはあいう・かきく等の如く、単にして余響なき音にして」(上田万年・松井簡治編『大日本国語辞典』1915-19)

(45)・(47) に出てくる「綴音」, 「複音」は、『大日本国語辞典』によれば、それぞれ、「或る音と他の音と綴りあはせて成りたる音。」「父母音の複合して成れる音。子音。」であり、いずれも《音節》に相当する。

(45)~(47) の「単音」の語釈は、(44) に挙げた大槻文彦の「単音」の影響によるものではないかと思われる。『言海』における「単音」の語釈を挙げておく。

- (48) たんおん (名) ㊦ 五十音中ノ、あ、い、う、え、お、ノ五音ノ

称。又、^{ボキン}母韻。綴音の対。(大槻文彦『日本辞書 言海』1889-91)

なお、「単音」を《母音》とする語釈は、戦後の諸橋轍次『大漢和辞典』(大修館書店、初版1955-60)などにも踏襲されている。

ところで、(47)の『大日本国語辞典』の用例の出典は、『日本国語大』の「単音」②(《短音節》)と同じ『漢字三音考』であるが、両辞典の解釈は異なる。『漢字三音考』には、「単音トハ。ア イ ウ カ キ ク等ノ如ク。」(例25参照)とあり、『大日本国語辞典』の「単音」の語釈には合わない(「ア イ ウ」は「単音」に当たるが、「カ キ ク」は、「複音」に当たると思われる)。

日本文典には、『漢字三音考』の「単音」に近い、『短音節』の意味の「単音」も見られる⁽¹³⁾。

- (49) ^{タムオム}単音とは長 ^{チャウタン}短の ^{シヨイン}諸韻を添へざる ^{モノ}者を云ふ。／[中略]／○直音の
単音／^ア阿 ^イ以 ^ウ宇 ^エ衣 ^オ於／^カ加 ^キ期 ^ク九 ^ケ家 ^コ古 (大槻修二『小学日本文典
上』1881: 15 オ-16 オ) (漢字の左ルビと訓読みは省略した)

一方、「単音」を《音節(モーラ)》の意味で使う例は、日本文典や辞典には、それほど多くないようである。

- (50) 問 音はすべて幾個にして字はすべて幾個なるや／答 単音は
八十一にして其字は僅に四十八個なり(春山弟彦『小学科用 日本
文典 卷一』1877: 6 オ)
- (51) Syllable, (名) …字音, 連字; 単字, 単音, 単語; 小節, 小句,
小部; 分子, 微分子。(島田豊纂訳『双解英和大辞典 再版』
1892)
- (52) Syllable, *n.* 連字, 単音, 綴, 小節, 小句, (イーストレキ『英

和新字彙』1901)

- (53) Syllable, *n.* 1. 単音, 熟音, 綴. 2. 分子, 微分. (和田垣謙三『新英和辞典』1901)

(50) の「八十一」の「単音」は、「五十音」(50音) + 「濁音」(20音) + 「半濁音」(10音) + 「鼻音」(1音) = 81音だと思われる(「五十音」にはヤ行の「イ」, 「エ」, ワ行の「ウ」を, 「濁音」には「ヂ」, 「ヅ」を, 「半濁音」にはガ行鼻濁音を含む。「鼻音」は撥音を指す)。

日本文典では、音節レベルの音を「単音」と呼ぶものは限られており、むしろ《母音》を「単音」と呼び、それに対して、《音節》を「複音」と呼ぶものも多く見られる。先に挙げた、《母音》に「単音」という言い方を挙げている日本文典には、いずれも、それに対応する「複音」という言い方が見られる。

辞書では、明治後期の英和辞典(51~53)に、《音節》を表す「単音」が見られた。

4. 音声学用語（概念）としての「単音」の形成

今日の音声学用語の「単音」(《音声の最小単位》)は、個々の母音や子音のことを指す⁽¹⁴⁾。これに相当する概念は、アルファベットを用いる(とくに、子音文字と母音文字をともにもつ)言語には、古くからあったと思われるが、日本語においては、《音節》と対立する《単音(音声)》(《音声の最小単位》)の概念が普及するのは、ほぼ明治に入ってからのことである。この概念を表す語としては、明治末ごろから「音素」や「素音」が使われたことがある。「素音」の例を挙げておく(「音素」については、阿久津 2022: 19-20 参照)。以下、用例は、主に「国立国会図書館デジタルコレクション」によって求めた。

- (54) 処で、カ行の素音である発声は、クといふ音の中から、ウのひゞきを去ったもので、其の発声のやり方は、喉の奥から、強く急激に息を出し、其の息が上顎の裏面につきあたるやうに発音するのである、(山松鶴吉『小学校之国語科及其教授法』1902: 128) (「発声」は子音のこと)
- (55) p, e, n, 各素音を分解的に一々正確に発音し、生徒をして之に倣はしむること。(伊藤長七『英語及其教授法』1908: 20)

一方、《音声の最小単位》を表す「単音」の例は、明治後期に現れる。

- (56) 我国の字音は首尾異なる二音より成立つと雖とも英国の文字二十六字は皆な単音にして一字に二音を雑ゆるものなし(片山清太郎、堀江章一『独修新法 英語学全書 前篇』1886: 9)
- (57) Tan-on (単音), *n*. A single sound; one letter-sound. (井上十吉編『新訳 和英辞典』1909)
- (58) 具体音声、或一人が或時発した音声、その時の臨時要素までも尽く考へたもの。／抽象音声、多くの人が多くの場合に発する音声に共通な固有的性質のみを取り出して考へたもの。／(イ) 単音—音質上一種の音をいふ。／(ロ) 単音の連結—連結上、表れる高さ、強さ、大きさ。
- 今仮に音声ばかりを分析してその最小単位を求めるならば、それは一つの単音となる。例へば、(a) とか (k) とか (s) とか いふものが是である。(神保格『言語学概論』1922: 48, 81)
- (59) 今迄、父音及び母音を各個の単音として説明したのであるが、実際には音が単独で表れることは極めて稀である。大抵は種々の音声が発結合して音節を形成し、又其音節が発結合して語詞を形成する。(目黒三郎『仏語の発音』白水社 1927: 17) (「父音」は子音のこと)

- (60) 国語の音節は、またおのづから特異の性質をもつてゐる。これは、国語を構成してゐる単音の関係がヨーロッパ語などに於けるものとやゝ趣を異にしてゐるのに本づいてゐる。国語に於ては、子音が単独に言葉の成分の中にあらはれて来ることが無い。子音は母音に伴はれてゐるのが普通である。（安藤正次『言語学概論』早稲田大学出版部 1927: 176）

これらの例に見られるように、この時期の「単音」は、後の《音素》の概念を含んでいる（音声学的な概念である《単音（音声）》と音韻論的な概念である《音素》とは未分化であった）。(58) の神保格の「抽象音声」の理論は、D. ジョーンズの「音素解釈」に影響を与えたものであり（ジョウズ 1939: 5）、大正期に《音素》に近い概念が生まれてきているようすがうかがえる。

音声学的な概念である《単音（音声）》と、音韻論的な概念である《音素》とに別の用語を使い、両者を区別する例は、昭和初期から見られるようになる。

- (61) 音声学にいふ単音は、一定の音色をもつて特徴とする単位語音である。[中略] 耳に聞える音色の相異は、心理的な事実であるが、これは単音の成立に際しての物理的および生理的条件における相異に対応する。語音を心理的印象から系統的に類別するときは、いはゆる「素音」を得るが、その類別の精密と明確とを期しがたいこと、あたかも味または匂におけると同様である。そこで従来音声学では、主として音声を発するに当つての生理的物理的条件を考察して、特定の単音を定立し、かくてすべての語音を系統的に排列することを得たのである。（佐久間鼎『日本音声学』京文社・柳原書店、1929: 58）（「素音 phonème」同書 p. 206）

- (62) 音韻論が国語の音声进行分析してとり上げる究極の単位は音素 (Phonème) であるが、この音素は、それ故、音声学が取扱ふ単音と一致するとは限らず、意義を考察する上に差支ない限りは音の細別を詮索せず、似寄の音を包括せしめた所の一族を意味するのである。而して、我が国語の音素を表現するには日本式綴り方のローマ字が適切である。(菊沢季生『国語音韻論』賢文館、1935: 10)
- (63) 上の狭義の phoneme を「音素」と称してはと思ふ。…／之に対し、言語行動に属する「音声」に於ける最小単位を「単音」と称しては如何であらうか。単音は元来 Einzellaut の訳語であらうと思ふが、Einzellaut は大体 Jones の第一度の abstract sound たる speech-sound に当るが、concrete sound に当ることもある。「単音」は concrete sound に限定したいと思ふ。(服部四郎「Phoneme について」『音声学協会会報』60, 61 日本音声学協会 1940: 11)

上では、《単音 (音声)》に「単音」(61~63) が、《音素》に「素音」(61)、「音素」(62・63) が使われている。

(63) の Jones (D. ジョーンズ) の説について触れておく。ジョウンズ (1939: 5) によれば、「第一度の abstract sound」と「concrete sound」とは、ともに、神保格が提唱し (例 58 参照)、H. E. パーマーが実用化したもので、前者は「諸書中で「話音」(speech sound) なる語で通称されてある所のもの」、後者は「単一発音 (a single utterance) に際して聴取し得るもの」である。たとえば、同一人が母音 u を、同じ調子で二十回発音した場合、人々は二十の「具体音」を聞き取るが、同じ音だと見なす (第一度の抽象)。「第一度の抽象音」は、国際音声記号 (IPA) の精密表記のレベルに当たるようである。

今日の音声学用語の「単音」は、こういった議論を経て、「音素」と区

別されることによって、成立したといえるようである。

5. おわりに

以上、見てきたことを、「はじめに」に挙げた①～③に合わせて、まとめておく。

①「単音」は、一般にどのような意味で使われることが多いのか。

現代日本語（書き言葉）において、最もよく使われる「単音」の意味は、《音符の表す音》であり、《単旋律》を含めて、音楽分野での使用が多い。これに次いで、《音声の最小単位》の意味でよく使われるが、具体的には、音節（モーラ）レベルの音ととれるものが多いようである。

②「単音」という語は、どのように意味が変遷してきたのか。

「単音」は、中国では12世紀に使われた例があり、中国語では、主に《単音節》の意味で使われている。日本では、江戸時代に、音節（モーラ）レベルの音を表すのに使われた例が見られ、明治以降は、さまざまな意味で使われようになるが、音楽分野における《単旋律》、言語分野における《音節》、《母音》が主なものであった。日本文典では、《母音》を「単音」とし、《音節》を「複音」と呼ぶ例が多く見られた。

③言語学・音声学用語としての「単音」は、どのように形成されたのか。

「単音」を《音声の最小単位》の意味で用いる例は、明治末に現れた。大正期には、抽象音声を表す「単音」が現れ、昭和初期には、音韻論的な単位である「音素」と区別して、「単音」を用いるようになった。

《注》

- (1) 「[たんおん (単音)]と同じ。」とあり、夏目漱石の『坑夫』(1908)の例が挙げられている。
- (2) たとえば、音楽之友社の音楽辞典(『標準音楽辞典』1966、『新音楽辞典』1977、『新訂 標準音楽辞典 改訂新版』1991、『新訂 標準音楽辞典 第2版』2008など)、『実用音楽用語辞典』(ドレミ音譜出版社2011)などでは、「純音 pure tone」の別の言い方として「単音」を挙げている(『新訂 標準音楽辞典 第2版』には、「単純音, 単音ともいう。部分音を含まない, したがって波形はもっとも単純で, 正弦波形をなす。もっとも単純な音で, 音色による相違が生まれぬ。」とある)。一方、『伊英独仏 音楽用語辞典』(春秋社2015)では、「monotone」の訳に「単音」を挙げている(「〈名〉単音。詠誦。定旋律; 〈形〉単調な。一本調子の」とある)。
- (3) 『日本国語大』の「単音」②(《短音節》)に挙げられている用例が、大正期の『大日本国語辞典』(1915-19)の「単音」に載っているが、語釈は異なる(3節参照)。また、「単音」③(《単旋律》)に当たる意味が昭和初期の『大辞典』(平凡社1934-36)の「単音」に載っている(「囀 monody 囀 和声を交へず, 旋律のみを附するもの。複音の対。」とある)。
- (4) ほかに、たとえば、『研究社 医学英和辞典』(研究社1999)の「Flatness」には、「単音(異常に硬いものをたたいたときの共鳴音を欠いた音)」という意味が載っている。
- (5) 一般的には「単音」とはいえないもの(「それを分解して, 様々な単音にしてみる。1 八島土奴美 八(ヤ, ハチ, ハ, ヤッツ, パ)」)を含む。
- (6) 「単語」の誤記(誤植)かと思われるもの(「五十音の一つ一つを単音の頭に持つ言葉」)を含む。
- (7) 「ア(という単音)」のほかに、「英語に単音の言葉が実に多い」という例がある。
- (8) このほかに、「単音調理法」という造語が見られたが、同一記事中に「単音」があるため、「単音」を含む複合語には入れていない。
- (9) ほかに「CCL 語料庫」の「古代漢語」で「単音」を検索した結果は48件であったが、いずれも文字列としての「単音」で、語としての「単音」の例ではなかった。
- (10) 「単音」を含むとはいえない「簡単音楽」, 「簡単音響」を含む。
- (11) 台湾の言語学の教科書である、謝国平『語言学概論 三版』(三民書局, 2011: 95)には、「単音 (phone)」とある。
- (12) ジャパンナレッジ「明治文学全集」の検索結果は、ページ(数)で現れ、

かつ、1つの文献に相当数の「単音」が現れたため、ここでは文献数のみを挙げておく。

- (13) 伊沢修二『日清字音鑑』（1895）でも、「単音」を同様の意味で用いている（「我が字音ヲ分類スルニハ、先ヅ単音ト複音トニ分チ、次ニ音尾即チ韻^{ヒメキ}ノ同一ナルモノヲ、一処ニ集メ、各々五十音横列ノ順序ニ排列セリ。」（緒言 p.1）とある）。
- (14) これに相当する英語の音声学用語の phone（A speech sound; the smallest unit of sound in speech that can be distinguished from any other such unit.（単音。他の音と区別できる音声の最小単位。））の初出は1866年ごろである（*Oxford English Dictionary* 2023年7月修正版）。

参考文献

- 阿久津智（2022）「専門語の語史研究の方法」『拓殖大学 語学研究』147, 拓殖大学言語文化研究所, 1-23
- 斎藤純男（2010）『言語学入門』三省堂
- ダニエル・ジョーンズ, 大西雅雄訳（1939）「具体音と抽象音」『音声学協会会報』59, 日本音声学協会, 5-8（原著1938）

【使用データベース類】（いずれも最終閲覧は、2023年10月）

「朝日新聞クロスサーチ」朝日新聞社

<https://xsearch.asahi.com/>

「Oxford English Dictionary (Revised 2006)」Oxford University Press

<https://www.oed.com/>

「漢籍全文資料庫」中央研究院歴史語言研究所

<https://hanchi.ihp.sinica.edu.tw/ihp/hanji.htm>

「貴重資料デジタルコレクション」国立教育政策研究所 教育図書館

<https://www.nier.go.jp/library/rarebooks/>

「現代日本語書き言葉均衡コーパス」国立国語研究所

<https://clrd.ninjal.ac.jp/bccwj/>

「国立国会図書館デジタルコレクション」国立国会図書館

<http://dl.ndl.go.jp>

「CCL 語料庫」北京大学中国語言学研究中心

http://ccl.pku.edu.cn:8080/ccl_corpus/

「ジャパンナレッジ」ジャパンナレッジ

<http://japanknowledge.com>

「昭和・平成書き言葉コーパス」国立国語研究所

<https://clrd.ninjal.ac.jp/shc/>

「中国基本古籍庫 ver.8」愛如生

<http://er07.com/>

「中国哲学書電子化計画」中国哲学書電子化計画

cctext.org/zh

「東京大学史料編纂所データベース検索」東京大学史料編纂所

<https://wwwap.hi.u-tokyo.ac.jp/ships/>

「日本語史研究資料」国立国語研究所

<https://dglb01.ninjal.ac.jp/ninjalddl/>

「日本語歴史コーパス」（中納言 2.7.2 データバージョン 2023.03）国立国語研究所

<https://clrd.ninjal.ac.jp/chj/>

「古典籍総合データベース」早稲田大学図書館

<https://www.wul.waseda.ac.jp/kotenseki/>

（原稿受付 2023年10月23日）